

外山正一とミシガン大学

秋山 ひさ

外山正一の海外留学はアメリカがはじめてではない。すでに幕末に幕府から選ばれてイギリスに渡っているが、この留学は一年そこそこで帰国を余儀なくされている。維新によって幕府が瓦解し、明治政府は新政府の立場から、幕末の留学生をいったんすべて引揚げさせたからである。外山は明治元年六月に帰国して静岡学問所の教授に就任する。この英国留学は個人的経験としては、その後の外山に益するところ大であったかもしれないが、日本における新しい西洋の学問輸入という点では、たとえば西周と津田真道がオランダ留学から持ち帰ったような、直接的成果はもたらされていない。外山にとっても、日本の社会にとっても、影響があったのはアメリカへの渡航であった。

明治政府は殖産興業、富国強兵の遂行に役立つ世界的視野をもつ人を育成するのに、最も有効かつ強力な方策は、有為な青年を海外に留学させることだと認識していた。幕末以来の海外に派遣された使節や留学生の帰国後の成果が高く評価されたからである。しかし中には学費に窮するもの、病を得て療養に月日を費やす者、あるいは放逸な生活を送る者

も現われて、初期の目的を達成出来ずに挫折する者も少なくなかった。私費の渡航者、それも脱藩同様で出かけた者には、経済的な行詰りから商業を営むうちに勉学の志を失い、商人に変じてしまった者もあった。高橋和喜治（是清）などのように、横浜の外国商人の世話で渡米し、身を寄せた米人宅ではじめて、自分が奴隸として売られていたのを知ったという例もある¹。

新政府は「海外留学生規則」を制定して、皇族以下庶民まで官費私費を問わず、統一的な選考基準によって留学生に渡航の許可を与えることにしたが、同時に国家的見地に立って、彼らを援助し適正な育成をはかる必要があると認めるようになる。明治三年、外務省少務升務使に任命された森有礼が、米国に駐在使として最初に赴任したときに与えられた任務は、米国との外交事務と留学生の管轄であった。森の一行は六名であったが、この中に外山正一は升務少記として加えられた。英国留学中に知り合った森の抜擢によるといわれている。この時期に陸続と欧米へ渡る留学生を見るにつけ、勉学半ばにしてイギリスより帰国の止むなきに至った外山にとって、ロンドンで知り合い、今や新政府の中枢人物となっている森の駐米赴任は、再度の海外留学を適えてくれる絶好の機会だったにちがいない。

外山はアメリカに渡った。しかし、蕃閥政治の色濃い新政府の官吏になることは、幕臣出身の外山には異和感を抱かせるものであったろうし、行末に限界のあることをさとしたのであろう。森が配慮して外山に与えた升務少記の職位を、外山は滞米一年後には惜しげもなく捨て、一留学生となったのは一八七二年（明治五年）のことである。

外山はアンナーバーの高校で約一年過した後、翌年九月にミシガン大学に入学する。当時アメリカに留学した者の多くは、ニューヨーク、ニューブランズウィック、ボストン、ニューヘイヴン、フィラデルフィアなどに滞在していたが、新しく勉学を志した外山がこういった東部の大学を選ばず、アンナーバーのミシガン大学に決めた理由は何だったのか。理由の一つは、あえて日本人留学生の多い東部を避けて、独り勉学一途に励もうという固い決意を抱いていたからである。総じて日本人はどこでもグループをつくるといわれるが、とりわけ異国にあつては日常生活の不自由さと精神的不安を解消するために、故国にあつては全く見知らぬ者同志でも、あるいは主義主張の異なる者とも、相集つて日本社会延長線上の社交集団を形成する。これは仲間同志の精神的安定を得ることはできても、勉学の実を上げる効果を發揮するとは云い難い。留学生を管轄する森有礼の下で仕事をしていた外山は、この事を充分承知していた。すでにロンドン留学時代から、外国留学を効果的ならしめるには日本人同志の同宿を避けることだと、留学生の分離散宿を強く主張しその運動をしていたことから²、彼が日本人の多い東部を避けたのはうなづける。

しかしもっと明確なそして切実な理由は、官を辞したことによる経済上の理由である。生活設計上当時最低の費用で、できるだけ高い教育の受けられるところとして、授業料の安い州立大学を選んだのである。東部の大都市に比べてアンナーバーは暮し易かったし、ミシガン大は合衆

国ではすでに高い評価を受けつつある州立大学であつたからである。³

外山はミシガン大学へ入学した。彼はミシガン大の最初の日本人学生といわれている。『山存稿』にそのように記されているし、⁴ エンジェル学長 (James B. Angell) の回想記にも「一八七三年に最初の日本人学生が入学し、一八七六年まで在学した。彼は才気煥發で人を惹きつける性格だったのでみんなから賞讃され愛された。彼とは外山正一のことである……」とある。⁵ さらに、外山の死を報じているミシガン大学新聞にもその略歴を記して、「最初の日本人学生」と報じている。⁶ もっともこの記事の情報は、日本人卒業生から外山の死の報せを受取つたエンジェル学長から出たものであるから、同じ内容であるのは当然である。

しかし、外山は最初の日本人学生ではなかつた。一九〇〇年九月二日付の『ザ・デトロイト・フリープレス』紙は、エンジェル学長を囲む日本人留学生八人 (女性一人を含む) の写真を掲げ、同大学で学んできた日本人留学生の沿革を説き、在学生の専攻別人数を挙げ、日本の大学事情、学生生活などを紹介しているが、そこにはミシガン大学最初の日本人は桑名のタガイ・サイスケとある。⁷ 学長の記事と新聞記者の書いたものとは、前者に分がありそうだが、実は後者の方が正しい。チェイズ (Theodore R. Chase) が著わした当時の教員と学生の略歴名簿によつても、⁸ 大学の教職員、学生名簿によつても、一八七二年の選科生の箇所にタガイ・サイスケ (クワナ) とあり、一八七三年の選科生のところにトヤマ・マサカズ・ステハチ (シズオカ) と出ている。タガイは外山より一年前に入学し、二年間在学しているので、外山とは一年間共に過していることになる。タガイ・サイスケとは恐らく桑名出身の多芸誠輔の

ことであろう。彼は吉田清成、井上馨の斡旋により、勸農寮派遣の官費留学生として明治三年に渡米、帰国後は勸農寮工職方を勤めているが、¹⁰詳しいことは不明である。

外山はミシガン大における最初の日本人留学生でなかったのであるが、同時に七四年には外山の他にタケムラ・キンゴ（エド）が薬学部に入學しているのが同名簿に見られる。¹¹タケムラとは竹村謹吾のことであり、彼は明治四年に静岡出身の私費米國留学生として文部省より留学許可を受けた留学生の一人であるが、¹²森有礼から竹村宛へのアメリカ人への借金の返済を促す手紙も残っているところから、¹³公的に明らかである。帰国後は大蔵省に出仕しており、¹⁴彼の名は「外山正一の日記」¹⁵にも見出せるので、二人の間に交友関係があったことがわかる。

そして今一人、ミシガン大学の公式記録にもわが国の資料にも見出せないのであるが、ナガサキ・ミチノリが一八七三年に在籍していたことは確かである。ミシガン・ヒストリカル・コレクションに残っているナガサキからエンジェル学長に宛てたニューヨークからとロンドンからの二通の手紙がそれを物語っている。¹⁶彼はアンナーバーを去って後合衆国内を方々旅行してロンドンに赴き、¹⁷外交官としてそこで活躍していたのである。小野英二郎が一九〇六年十二月十九日にニューヨークで開かれたミシガン大学同窓の晩餐会の席上行った「当大学における日本人学生」と題する講演の中で、日本人卒業生の活躍にふれ、外山と同時期にいたナガサキ・ミチノリを著名人の一人に挙げている。¹⁸ちなみに、外山の死をいち早くエンジェル学長に報せたのは小野英二郎である。

このように、ミシガン大学には外山より一年前にタガイが、同年には

タケムラとナガサキがいたわけで、外山は最初の日本人学生でもなければ、ただ一人の日本人でもなかった。その後ミシガン大学への入学者は続々と増えて、一九〇〇年までに七二名に達するのであるが、彼らの経歴、その後の動向についてはグロナー（Robert Jay Groner）の詳しい研究がある。¹⁹

三

外山はミシガン大学では文理学部（Literature, Science and Art）の選科生であった。現在残っている大学の学籍簿によると、一八八六年に名誉修士号がおくられているが、大学の学位は修得していない。三年間の在籍中に取得した科目は、数学五科目、フランス語二科目、植物学、物理学、地理学がそれぞれ一科目で、全部で十一科目を聴いている。²⁰『山存稿』には化学を専攻したと記されているが、²¹公式記録にはどこにもこの科目を受講した形跡はない。そして学籍簿には成績が記載されておらず、学籍簿の用紙は鉱山学コース（Mining Engineering）のものが使われている。

当時ミシガン大学は法学部、医学部、文理学部の三学部からなっていて、文理学部は古典学、科学、ラテン語と科学、土木工学、鉱山学の五つのコースがあった。古典科目と実用的科目が並存している履習コースは当時の新しい傾向であった。一九世紀後半のアメリカは、自然科学の飛躍的發展と産業界からの職業訓練、技術的研究に対する要望が高まり、大学教育のカリキュラム改革を促す気運に満ちていた。改革の先鞭

Name: *Toyama, Masakazuh S.* Address: *Shidzoka, Japan* **MINING ENGINEERING.**

PREPARATORY.	FRESHMAN.	SOPHOMORE.	JUNIOR.	SENIOR.
¹⁸⁷ Eng. Gram. Rhet. Eng. Lit. Med. Geog. Anc. Geog. Phys. Geog. Botany. Zoöl.	¹⁸⁷ Hist. French. Math.	¹⁸⁷ Survey. ½. + Geom. Draw. ½. + French. Math. Eng. Pl. 13th. Essays.	¹⁸⁷ Anal. Chem. Lith. Geol. 2-5. Perspec. 1-6 w. Physics. + Gen. Geom. & Calc.	¹⁸⁷ Anal. Chem. Geol. 2-5. Lect. Eng. 3-5. + Zoöl.
¹⁸⁷ Geol. Chem. Nat. Phil. Mod. Anc.	¹⁸⁷ Math. Cl. French. Eng. Lan. 1-6 w. Botany, 6 w.	¹⁸⁷ + Math. & Gen. Geom. & Calc. + Desc. Geom. ½. Rhetoric, ½. + Eng. Lit. ½. Chem. 3-5. Astron. 2-5. Essays.	¹⁸⁷ + Anal. Chem. Anal. Mech. Lect. Mach. 2-5. Mach. Draw. 3-5.	¹⁸⁷ Assaying. Min. Eng. Geol. Metallurgy, 2-5. + Drawing.

Form adopted Nov. 13, 1871. See Explanations on the Back.

をつけたのは一八六九年にハーヴァード大学学長に就任したエリオット (Charles W. Eliot) である。大学教育課程における実用的科目対古典科目の問題は、南北戦争のはるか以前から論じられていたのであるが、南北戦争十年の間にますます激しさを増していた。一方は、科学は生活目的にたいして古典文学よりも一層重要であるから、教育のうちでもっと大きな地位を与えられるべきだと主張し、他方は、人間の精神、人格、および趣味をかたちづくる点において、過去からの最良の遺産である古典文学を若者に修得せしめることは、教育にとって欠くべからざることであると譲らなかった。こういった論争の中で、エリオットが行った改革のうち最も大きなもののひとつは選択科目制であった。選択科目制は古典文学に打撃を与え、科学重視の教育への道を開いたのである。エリオットが行った画期的な大学改革は、他の大学においても同じように着手され、それぞれ目覚ましい成功を収めた。ハーバー (William R. Harper) はシカゴ大学で、エンジェル (James B. Angell) はミシガン大学で、ホワイト (Andrew D. White) はコーネル大学でそれぞれ大学の改革を行った。²³

ちなみに、一八七一年に学長に就任したエンジェルに関して述べるなら、男女共学の推進、外国人留学生の大巾受入れ、カリキュラムの改革、ラテン語、ギリシャ語必修の除去、大学院進学へのセミナー方式の導入、医学部の拡大充実など、エンジェルの在任中にミシガン大学の体制が整ったといわれている。²⁴

外山が籍を置いた文理学部のコースは、エンジェルの一連の改革によって設けられたものであった。今、外山の取得科目を検討してみる

と、鉱山学コースでも不思議はないが科学コースのものに一番近い。いずれにしても帰国後外山は東京大学で英文学、心理学、歴史学、そして社会学を教授しているのであるが、留学中にこれらを何一つ正規に学んでいないのである。

外山は何故自然科学の科目ばかり好んで履習したのか。それは日本社会の要求からくるものであったか。たしかに幕末から明治にかけて社会科学への関心が拡まったとはいえ、欧米の軍事力に対抗しうる技術が要請され、明治政府が殖産興業の振興をはかる政策を樹てたときから、それを担う人材の育成が急務であった。明治初期の留学生はこの国家的要請に応じて学業に励んでいる者が多かった。しかし外山はほんとうにこういう道を歩もうとしたのだろうか。きっとそうではあるまい。彼は語学力に長けていた。欧米の思想や文化を習得するのは外山にあっては、外国生活と読書で可能であった。むしろ自分にとって不得意な科目、あるいは日本で学び得なかった科目を自ら課すことによって、独学では学ぶのが難しい教科を大学で身につけようとしたのである。数学(三角法と幾何を含む)を五科目も履習しているのはその現われである。

外山に自然科学科目を選択させた第二の要因は、彼と親しかった友人の強い影響であろう。彼らは理科系学問を修めた者が多く、外山は個人的に彼らに触発され、自然科学の基礎知識を高めたいという願望を持ったと思われる。すなわち、森と同行して外山と一緒に渡米して以来生涯の友人であった矢田部良吉は、明治四年にコーネル大学に入学して植物学を修めているし、同年に開拓使派遣の留学生山川健次郎は、イエール大学に入学して物理学を学んでいる。幕末時に英国へ共に留学した仲

間、菊地大麓は明治三年再び英国に留学、ケンブリッジ大学で西洋近代数学を学んでその移植に力を尽しているし、箕作佳吉はイエール大学で動物学を修めるといった具合に、外山と同時期に英米に渡った親しい仲間には自然科学を学んだ者が多く、皆それぞれ学位を得て帰国後は開成学校、東京大学の教授になっている。外山はこれら友人の影響を少からず受けたことは充分考えられるのである。

三つ目に考えられることは、外山がミシガン大に入ってすぐモース(Edward S. Morse)の講演を聴いたことである。ミシガン大学ではスチューデント・レクチュア・アソシエーションの主催で毎年何人かの講師を招いて講演会を開催している。外山が入学した年のプログラムは、十月から二月までの間に女性二人を含む十一名が招かれており、文学者、牧師、作家、科学者、婦人参政論者、漫画家など多彩な顔ぶれで占められている。モースはこのプログラムの講師の一人であった。²⁵モースの動植物を巧みに黒板に図示しての科学的進化論の講演は、当時アメリカで非常な人気を博していた。この講演が外山にとって如何に感銘深いものであったかは、後に外山の推挙でモースが東京大学に動物学の教授として就任することになった経緯をみても明らかである。ミシガン大学に入ってすぐモースの講演を聴いたことは、外山の大学での履習科目を自然科学系へ向わせた大きな原因であると充分考えられる。折しもアメリカは産業の興隆と科学重視の要望が青年層をとらえていた時期である。学生自身がモースを講師に選んでいる事実からもこのことがうかがえる。来たるべき時代は科学の時代であるとするアメリカの社会状況に、外山が影響を受けたとしても不思議はない。

このようにして外山は大学で自然科学を学んだ。しかし結局、学位を取らず、リベラル・アーツとしてのみそれらを学んだにすぎなかった。帰国後東京開成学校で最初に受持ったといわれる化学の講義は、当時外国人との関係や学科分担上の止むを得ない事情によるもので、外山がミシガン大学で化学を学んだからではない。彼は恐らく薄氷を踏む思いで、この科目を教えていたのではあるまいか。翌年にはもう化学を担当せず一年で終っている。訳読の巧みな外山は、人材の手薄な科目を一手に引受ける形で、英語、英文学、心理学、論理学、歴史学、哲学、社会学をあれこれ教えざるを得なかったが、これは東京大学創設期を担った日本人教授の宿命であったといえよう。

四

外山は一八七六年(明治九年)帰国した。アンナバーのM氏に宛てた故国への安着を報せる八月十九日付の手紙が、大学の年報に全文掲載されている。それは外山が故国を留守にしていた間に、日本がすっかり変ったことを生き生きと伝えたものである。鉄道の敷設、西洋に範をとった郵便制度の確立、電報の普及、公立学校の設立、多種多様な書物の輸入、国民の熱心な知的活動、貨幣制度の改革、何種類も発行されている新聞、言論の自由、「専制的」「抑圧的」の形容詞を冠して絶えず政府を攻撃する急進的な新聞・雑誌の主張、発行停止処分を受けても名前を変えて同じ新聞がまた発行されている有様など、明治初年の激変した日本の情勢を紹介している。実際、廃藩置県の前年にアメリカへ渡り、

徳川幕府の封ぜられた静岡を自らの出身地と書いた外山にとって、六年間の留守の間に故国は瞠目に値する西欧化を遂げていた。外山の文面は日本が欧米並みに諸制度を整えつつあることを気負いをもって告げており、アメリカの知人に日本に対する認識をあらたにさせようとする意気込みさえみてとれる。

この手紙のオリジナルは残っていないが、現在ミシガン大学ベントリ・ヒストリカル図書館には、外山がエンジェル学長に宛てた三通の手紙が保存されている。第一の一八八三年（明治十六年）三月一日付の便りは、斎藤金平が処刑されたというアンナーバーでの噂を否定して、彼が下した判決が逆に誤って伝えられたのであろうという内容にはじまり、エンジェル氏が来日した際相憎会えなかったことを詫び、キャンパスの真中に目下建設中の大図書館に関心を寄せ、学生がフットボールをするのに十分なスペースが残されることを希望し、最後にエンジェル氏の写真を所望して終っている。

この手紙の書かれた前年、明治十五年には外山は東京大学の文学部長に任ぜられており、注目すべき「新体詩抄」が出版され、加藤弘之との「人權新説」論争がはじまるなど、論壇を賑わせる活躍をしている。エンジェルは一八七一年から一九〇九年まで学長として在任しているが、途中で中国大使やトルコ大使としてそれぞれの地に赴任しており、日本へも立寄っている。しかし外山の日記にはエンジェル学長の来日のことは何の記述もない。僅かにエンジェル来日の情報もたらされたと推察される日記の記述は、二月四日の「竹村謹吾氏来訪あり」の一行で、日付から推して来日のエンジェルのことを話題になったと思われる。しか

しこの時期にはモースが離日（二月十四日）するということで、フェノロサ宅やビゲロー宅での送別会があり、外山はそれに出席しているの、エンジェルとの会合は日程の調節がつかなかったのかもしれない。

外山はエンジェルとそれほど親しい間柄であったわけではない。相手は自分が学生だった頃の学長であり、学生時代特別に世話になった人でもなかった。それは先に示した外山の故国への安着の便りがエンジェル宛でないことから察せられる。エンジェルの方でも来日するまでそれほど外山に注目していたとは思えない。明治十六年に来日してはじめてエンジェルは、日本の教育界の中枢メンバーとして重要な位置を占める一方、大学以外の活動でもしばしば新聞、雑誌にその名が登場する著名人外山のことを知らされたにちがいない。そのときエンジェルは、外山がかつてミシガン大学に三年間籍を置いた者であることを誇らしく思ったであろう。卒業生の評価は大学の評価につながる。エンジェルは外山に強い関心を持ち、ミシガンへ帰って彼のことを詳しく調べ直したにちがいない。外山の手紙がこのとき以降残されているのもその現れである。タガイ、タケムラ、ナガサキは外山と同時期の同じ選科生であるのに、彼らの履習科目の記録は何も残されていない。外山だけ科目修得の公式記録が学籍簿に残されているのは、明らかに後日特別に調査して記録されたと思われるのである。外山がミシガン大学より名誉修士の学位が授けられるのは、エンジェル来日の三年後、一八八六年（明治十九年）である。外山の日本での評判と地位が高まるにつれ、「なんとしてもわが大学から敬意を表して同窓生の一人として記念したい」、こんな思いがエンジェルをとらえたと思われる。外山の学籍簿だけ残っているの

も、称号を贈るに際して必要な資料として作成されたと考えられる。

外山がエンジェルに宛てた二通目の手紙はミシガン大学から与えられた名誉修士号に対する礼状である。ごく簡単な文章で、そつけないくらい短い。すでに功成り名遂げている彼にとって、さほどの感激でもなかったのかもしれない。また日記のどこにもこれに関する記述はない。しかし外山の名声と成功は確かにミシガン大学の名を日本人に高からしめた。十九世紀末から二十世紀初頭にかけてミシガン大は日本人留学生の最も多い大学の一つとなっている。今日でもその傾向は変わらない。

さて、エンジェル宛の外山の三つ目の手紙は一八九五年（明治二十八年）十月六日付のもので、ミシガン大学の図書館へ戦争の写真アルバムを送ったという案内状である。別便送付のアルバムは最近の戦争現場のシーンを写したもので、学生にも見せてやって欲しいとある。これは現在、大学図書館アジア・ライブラリーに保存されている『日清戦争写真図』（博文堂発行）で、外山正一寄贈のラベルが貼られている。

外山がわざわざ日清戦争の写真帖をアメリカに贈ったのはなぜか。エンジェルから何か問合せてきた返事かもしれない。あるいは、エンジェルがかつて中国大使であったことから、この戦争が彼にとって大きな関心事であろうと察して外山が写真を送ったとも考えられる。しかし写真内容からうかがえることは、そこには中国の惨状と戦勝国日本の国威発揚が描き出されているのであり、列強に伍して戦い、その存在を欧米に認識させる戦果が写し出されている。外山がこの写真帖をエンジェルに贈ったのは、日本の戦勝を誇る気持が根底にひそんでおり、明治の知識人の幾人かが後半生においてそうであったように、欧米に対する精一杯の

国家誇示の立場からの行為であったといえよう。

五

外山が滞在していた時期のアメリカはどのような時代であったか。そして彼はそこで何を学んだであろうか。帰国後の外山の活動を見る上において、当時のアメリカを是非知っておかねばならぬ。

一八七〇年代のアメリカは南北戦争後のいわゆる「金びか時代」の真只中であつた。一九世紀前半までの「富への道」²⁷における勤勉と節約の倫理が成功をもたらすという思想は、一九世紀後半の「富の福音」²⁸にも受け継がれていたとはいえ、機会の均等はすでに失われ、競争と成果が重視される社会となっていた。成功はすなわち富の獲得であり、それは人類の進歩に貢献するものだという考えが支配的になりつつあった。一八七三年にマーク・トウエイン (Mark Twain) はウォーナー (Charles D. Warner) と共著で『金びか時代』 (Gilded Age) という小説を書き、産業の急激な発展と物欲の横行、国中をとらえた投機への熱望、機械文明下の風紀の頹廃、腐敗した多くの政治家、土地売買者、院外団員の争いなどの生態を描き、痛烈に批判した。今日、この時代を「金びか時代」と呼ぶのは、この本に由来する。

大陸横断鉄道の完成（一八六九年）は、資源と商品の流通を一挙に拡大し、大規模生産、企業の集中化、規模の拡大を促し、市場支配力を強めた大企業を出現させた。ヴァンダビルトの鉄道会社、ロックフェラーによる精油所、カーネギーによる鉄鋼会社などはその典型的なもので

Tokyo, Japan.
Oct. 6th 1895

Dear President Angell, -

I sent you separately
by a box in which you
will find an album of
war pictures for the li-
brary of the University of
Michigan. I believe
that the pictures will
be interesting to you
as they show some
genuine scenes in
the recent war.

When you will have
received the album
please give a notice
of the fact to the
students.

Hoping you are quite
well.

Yours very truly
M. Toyama

Tokyo, Japan
Oct, 6 th 1895

Dear President Angell : -

I sent you separately a box in which you will find an album of war pictures for the library of the University of Michigan. I believe that the pictures will be interesting to you as they show some genuine scenes in the recent war.

When you will have received the album, please give a notice of the fact to the students.

Hoping you are quite well.

Yours very truly
M. Toyama

外山正一がエンジェル学長に宛てた1895年10月6日付の手紙 (The James B. Angell Collection,
Michigan Historical Collections, Bentley Historical Library, University of Michigan 蔵)

ある。大規模化した企業は競争上の優位に立ち、トラストを組織して価格をつり上げ、低い金利で金を借りることなど、政府による制限が全くないままに、巨万の富を築いていった。すべての企業家が群小投資家や消費者をあざむき、不正に利潤を得たわけではなかったが、当時の悪徳資本家を後に「盗賊貴族」と呼ぶほどに、他を省みない一方的な手段で富の集積が行われたのであった。

このように、一方で農業生産の増大がはかれると同時に、他方で工業利益を主体とした産業化が顕著に進展した時代であり、幾多の「成功者」を生み出した時代でもあった。生物学の生存競争と適者生存との理論を人間社会にあてはめようとするソーシャル・ダーウィニズムが登場したのはちょうどこの時期である。それは産業主義時代のアメリカの要求に応えるものであり、富への渴望に従って行動した企業家の経済活動を正当化する理論的根拠を与える思想として援用されることになる。

ダーウィンが『種の起源』を表したのは一八五九年のことであるが、ダーウィンを育てたイギリスよりもアメリカの方が、いち早く社会的に受け容れられたといわれる。ダーウィンの母校ケンブリッジ大学が彼に名誉学位を与える十年も前の一八六九年にアメリカ哲学会は彼を名誉会員に推している。²⁹

ダーウィンの進化論を社会発展の理論として体系化したハーバート・スペンサー (Herbert Spencer) はダーウィン以上に広い影響をアメリカに与えた。クーリー (Charles H. Cooley) は「一八七〇年から一八九〇年の間に社会学を学んだほとんどすべてのものは、スペンサーの刺戟でそれを学んだのだと思う」と言っている。そしてさらに続けて、

「スペンサーの全著作の中でおそらくもっとも読み易い『社会学研究』は、それ以前、それ以後のどんな刊行物よりも社会学への興味を広範圏に湧きたたせた。」と記している。³⁰

スペンサーもまた、母国イギリスよりもアメリカではるかに有名であった。彼の社会進化論は南北戦争後の国内市場の統一と資本主義の急速な発展のなかで、当時の産業ブルジョアジーの行為を正当化するものであった。工業化を促進するエトスは倫理性よりも自然法則的な妥当性をもつ科学的理論に求められた。競争に打ち勝った成功者はまさに適者なのであり、失敗者は自然淘汰の過程で必然的に振り落された不適者なのである。スペンサーにとって、人口の増大は社会を衰退に導くものではなく、生存競争によって社会全体に利益をもたらすものである。能力や資質の優れているもの、技術のあるもの、技術革新を社会に応用するものが生き残り、それによって社会の進化が達成されるからである。彼にあつては進化の過程は必然である。従つてこの過程に干渉する政策は自由競争を妨げ、人類社会の進歩を阻害する。

スペンサーの社会進化論が「生存競争」「適者生存」の名の下に、いかにアメリカの産業界に受け容れられていったかについて、ホフシュタッター (Richard Hofstadter) は、ロックフェラー一世の有名な日曜学校での挨拶を引用している。「大企業が成長してゆくのは適者生存の一つの例にすぎません……。バラの一品種である『アメリカン・ビューティ』も、周囲に生長しているつばみを早いうちに犠牲にしてはじめて、見る人をうつとりさせる絢爛さと芳香を持った花に育てることができます。企業が巨大化していくのは決して悪い傾向ではありません。た

だ自然の法則と神の法則から生れただけにすぎません³¹。また、スペンサーの熱心な信奉者の一人、カーネギーは自伝でダーウィンとスペンサーを読んだときのことを次のように書いている。「私は光が洪水のようにふり注ぎ、すべてがはつきりしたことを覚えていて。私は神学や超自然的なものから解放されただけでなく、進化の真理をつかむことができた。『すべてはそのままよい。なぜならすべてはより良く生長するからである』は、私のモットーとなり、心の安らぎの真の源となった³²」

また「私がスペンサーを個人的に知りたかったよりも強く、誰か別の人を知りたいと欲したことはないであろう。なぜなら私ほどスペンサーとダーウィンに深く負っている人はいないだろうからである」とも云っている。組合運動、社会主義、マルキシズムが漸次力を増し、改革者たちが、資本家による搾取と労働者の貧困の事実を指摘し、社会の変革を求めているなかで、資本家が必要としたものは競争による進歩の信念を權威づけ、進歩のために搾取や貧困を正当化する理論であった。スペンサーは最新の科学の名においてこの要求に応える解答を示したのである。

このように十九世紀の最後の三十年にスペンサーの思想がアメリカを席巻したのであるが、しかし、この時期の実業家が意識的に自分達の営為に適合した理論をスペンサーに見出して、個人的成功を適者生存によって正当化したかどうかは疑問視される。カーネギーは例外的人物で、スペンサーを読みこなせるほどの教育を受けた「盗賊貴族」はいなかったであろう。一九〇〇年でさえ『フーズ・フウ』記載の実業家たちの八四パーセントは、高等学校以上の教育を受けていなかったといわれ

る³³。彼らは適者生存によって富を蓄積したというよりも、神が与え給うた徳に対する報酬であるというキリスト教倫理観に立っていたものが多かったと思われる³⁴。ダーウィニズムの原理が南北戦争後のアメリカにそっくり当てはまったのは、企業家が自覚的にソーシャル・ダーウィニズムを採用した結果ではなくて、物質的な富の獲得を目指す競争が熾烈をきわめると同時に、少なからぬ成功者を生み出していく社会状況をよく説明するものとして、ダーウィンやスペンサーを信奉する自然科学者、社会学者、哲学者、牧師などによる理論的展開によってである。

これら知識人の中で、もっとも強固な信念にもとづいてスペンサー理論を説いたのは、一八七二年にイエール大学社会学教授に就任したサマー（William G. Sumner）であった。彼はスペンサーの『社会学研究』（*Study of Sociology*, 1873）をテキストに用いることで宗教的保守性の強いポーター総長と職をかけて争うほどのスペンサー信奉者であった。サマーは云う。自由が弱者に苛酷に作用するからと自由競争に懸念を抱く経済学者がいるが、彼らは社会進化の法則を見失っている。

すべてのものは幸福であるべきだと机上のプランを立てて社会改良を試みるのは、自然の法則に逆らうものである。適者生存を好まないならば、その結果は不適者生存である。前者は文明の法則であり、後者は反文明の法則である。社会主義者や社会改良者が不適者を育て、しかも文明を前進させようと試みても、それは不可能である。われわれは自由、不平等、適者生存を選ぶか、非自由、平等、不適者生存を選ぶかのどちらかである。すべての体制は避けがたい悪をもつ。貧困は生存競争の結果であるかもしれない。しかし人間はすべて競争するべく生れている。

貧困が解消されるとするなら、それはさらに一層厳しい競争によって可能になる。³⁵

サムナーは徹底した自由放任論者、個人主義者として、自由貿易を主張し保護関税に反対した。国家干渉、国家統制につながる法案にことごとく反対し、金権政治をも容赦しなかった。帝国主義に反対し、米西戦争を非難した。そのため彼は社会改良主義者からも実業界からも反撥を招いた。イエールの同窓生から辞職を要求されるほどであった。

六

スペンサーがアメリカの知識人に与えた衝撃は測り知れない。最初の一八六〇年代の出版から一八九三年十一月までに、アメリカにおけるスペンサーの書物の販売数は三六八、七五五冊であったが、哲学や社会学のような難解な分野の著作で、これほどの販売数をもちたしたのは稀有のことであった。³⁶ おそらくどんな思想家も、一八七〇年から一八九〇年頃にスペンサーを読まなかった人はいなかったといつてよい。もちろん書物の流布がそのままスペンサー思想の受容を意味しない。反対意見をもつ人によっても書物は求められたであろう。しかしいづれにしても、スペンサーの思想体系は産業主義の新時代をもっともよく代弁するものだったのである。

外山正一がアメリカに留学していた時期は、アメリカ中がまさに、このスペンサー理論にわき返っていた時期である。外山はアメリカにおいてスペンサー理論の洗礼を受けたといつてよい。外山が終生スペンサー

社会学を東京大学で講じたのは、アメリカの知識人の誰もが受けたのと同じ衝撃を、スペンサーの社会進化論から受けたからにちがいない。

しかし外山は、スペンサーの徹底した個人主義の立場による自由な生存競争を信奉するサムナーの如きスペンサー主義者ではなかった。外山の帰国した明治日本は、アメリカのように個人主義が国民的伝統でもなければ、産業文化の成長期で産業ブルジョアジーが輩出する資本主義の急速な発展の時期でもなかった。ようやく幼弱な産業と資本の蓄積を育てようとしているところであった。一方では絶対制による国家の統一が急務とされ、政府は対外的にも対内的にも力を貯えて強大になろうとしていたし、他方では自由民権論者が自由の拡大と権利の伸長を主張する運動を繰りひろげていた。

スペンサーの思想がわが国で熱狂的に支持されるようになるのは明治十年代以降である。明治十年代にスペンサーがいかにもてはやされたか末広重恭が『二十三年未来記』（明治十九年）の中で、「五六年前までは書生の喜びで談ずるところは、ボックル、ギゾー、ミル等の著書なりしが近来は変じてスペンサーとなり、『スタチック』『スタデー・オブ・ソシオロジー』の如きは家々の帳裏に此の書あり、以て夫の王充の論衡に比すべし亦盛んなりと謂ふべきなり」と評すほどに盛行を見た。しかし、その受容のされ方はアメリカのそれとは全く異っていた。アメリカの場合は、時代の支配的勢力の保守的利益を弁護し、正当化するイデオロギー的役割を果すものであったが、日本においては、一方では、当時の進歩的勢力の中心だった自由民権運動の理論として、また他方では、日本の国家主義を守護する日本の保守的イデオロギーの正当化のための

二通りの理解があった。

もともとスペンサーの思想には注目すべき三つの点がある。第一は人間を一般生物の中に含めて、生存競争、優勝劣敗を通じて進化が行なわれることを認めたこと、第二は人間が有機体であると同じく、社会もまた有機体であると云ったこと、第三は社会の進化は軍事的段階から産業的段階へと進むが、産業的段階では政府は非干渉を守り、自由を最大限に尊重せねばならないといったことである。このスペンサーの進化論思想を社会に適用する場合には対立する二つの立場が導かれる。一方では生存競争、適者生存の自然法則を重視するのであるから自由放任主義に到達する。他方、国際間の関係が優勝劣敗の闘争だということから、個人に対する国家の至上性を認めることになり、国家主義を基礎付けることにもなる。また、社会有機体説は、社会を個人の機械的結合と認めるのとは明白に異なり、これを発展させれば個人主義・自由放任主義と対立する国家主義・干渉主義とならざるを得ない。

このようにスペンサーには対立する立場のいずれにも向いうる思想があったのであるが、初期の著作 *Social Statics* と *The Study of Sociology* では個人主義の色が濃く、社会は個人の総計にすぎないかのよう³⁷に述べているのに対して、*The Principles of Sociology* では、社会は個人の総計以上の有機体としている。前者は十八世紀的思想、そして後者は十九世紀的なそれであるといえる。自由民権運動の知識人が運動の理論的支柱として求めたのがスペンサーの前期の思想であったのであるが、後に同じスペンサーの後期の理論で切り返えされる羽目になった。ともあれ、自然権として個人の自由と平等が徹底して主張されている

Social Statics, 1850 が、松島剛によって『社会平権論』として訳出されたときなどは熱狂的な歓迎を受け、板垣退助などはこの書物は自由民権の教科書であるといったほどである。この書物が製本される前から読者は出版社に押しかけ、訳者の松島の稿料は約百倍にもなったといわれている。またこの書物の一節「国家を無視するの権理」を読んで感激した宮地茂平は日本政府の支配を脱することを決意し、国籍離脱の届を出して世間の耳目を聳動させた。³⁸自由民権論者にとってスペンサーの教えているものは政体の改良であり、政治的主張であった。

これに対して社会有機体説をとる者は、社会は有機体として自然の法則のままに漸進的に開化していくのであって、その改良に急進的過激な方策を用いるのは社会を衰退に導くものであると、秩序維持の保守的立場に立っている。外山の立場がそうであった。

民権運動論争が繰りひろげられている中において、『民権弁惑』を著わした外山は、何が政府の職掌であるかの区別について、「ヘルバート・スペンサーの如きは絶えて是の如き区別あることを知らず、皆一様に政府の任外にあると看做すが如し、されば論者が此の区別を立つるは正理にしてスペンサーの此の区別を立てざるは誤謬に属するか」と疑問形で表わし、「夫れ国の開化するに随ひて政府の権限の漸く狹隘になることはあれども、時世を論ぜず、国柄に係はらず、何は政府の職掌なり何は政府の任外なりと言ふが如き判然たる境界のあることは、余輩浅学者の未だ心得ざる所なり」と、一見、民権論者側の立場にあるかのようにみえるが、逆説的に政府の権限や干渉を認める立場に立っている。即ち、欧米諸国において民権が伸長し自由精神が発起したのは施政者の圧

政が続いたときであることを東西の歴史的事実に測して記述し、政府に對しては、無暗に民権を屈服しようと務むるなら民権は却つて發達すると警告し、自由民権論者に対しては、勢にかられて躁暴過敏な言論を逞うするなら却つてますます圧制の度を増すであろうと、学問的中立の名において、官民双方に反省を促しているかにみえるのであるが、基本的には急激な変革に反對し、現状を維持するという立場に至っている。「自由民権論者が政府の圧制なり政府の干渉なりとして大に民権自由を妨害するものと認め、此の上もなく忌嫌し、此の上もなく排撃する政略たる、其実決して民権自由を妨害するものにあらずして、却て大に世人の思想外に出づる所の功德あるべし。却て大に民権自由の伸暢に裨益あるべし」と、恰も民権の拡張のためには政府の圧制も必要であるかのようにさえ、読みとれるのである。

また、*The Principles of Sociology* を乗竹孝太郎が訳した『社会学之原理』（明治十五年）にある彼の新体詩による序文は、外山がスペンサー社会学をどのように理解していたかをよく表わしているので引用しておく。

……社会の事に手を出して、何から何とせわをやぐ、責任重き役人や、走り書きやらからしゃべり、舌も廻らぬくせにして、天下の事は一ト飲みと、法螺吹き立てて利口ぶる、新聞記者や演説家、此の書を読みて思慮なさば、人をあやまる罪とがの、少しは減りもするならん。それらの事はさて置きて、凡そ天下の事業は、畳一枚させばとて、足袋を一足縫へばとて、長の年月年季入れ、寝る日も寝ずに習はねば、出来る事にはあらざるに、独り社会のこと計り、年季も入らず学問も、

するに及ばぬ訳なれば、新聞記者や役人と、なるは最も易けれど、斯様なものが多ければ、忽ち国に社会党、尚ほ恐ろしき虚無党の、起るは鏡に見る如し、揉めにもめたる其あげく、蛇蜂とらずの丸潰れ、秩序も立たず自由なく、泥海にこそなるべけれ、再び浪風静まりて、大平海となる迄は、百年足らず掛らんは、革命以後の仏蘭西の、有様見ても知れたこと、そこに心が付きたらば、妄りに手出す勿れ、妄りにしゃべること勿れ、広き世界の其中に、恐るべき者多けれど、盲目同士の戦いに、越したる者はあらぬかし……台風烈しく吹くときは、その吹く中に過ちて、船を入れぬが揖取りの、上手とこそは云ふべけれ、政府の揖を取る者や、輿論を誘ふ人達は、社会学をば勉強し、能く慎みて軽卒に、働かぬやう願はしや。⁴¹

見て来たように、同じスペンサー社会学の理解でも民権論者の主張と外山のそれでは大いに異っているものであり、わが国におけるスペンサー理論の受容のされ方は、アメリカのそれと相異していることに注目しなければならぬ。サムナーに代表されるようにアメリカの場合、スペンサー思想のもつ個人主義の倫理と社会有機体説はならん分離されることなく、二つの要素を統一したものととして受取っていた。他方日本の場合には、スペンサーの二つの面が切り離され、自由民権運動論者は個人的自由を、保守的アカデミー学者は有機体説を、それぞれスペンサーから学んだのである。前者は政治運動と結びつけたが、後者は基本的にはその思想を科学として受け取ったことに大きな差がある。外山正一をはじめ、有賀長雄、加藤弘之などに代表される官学アカデミーの学者は、スペンサー思想が社会に対する科学的アプローチを示していた点に魅力を感じ

感じ、科学的観点において現状是認の立場に到っているのである。

たしかにそこには、在野であると官界であると問わず、明治期の多くの知識人が抱いていた国家主義が強く働いていたことも否定できない。

明治維新によって成立した日本の国家にまず急務とされたのは富国強兵であり、対外的に防衛して西洋諸国の侵略を許さないことであった。知識人は西洋諸国の対アジア政策を批判し反対しながらも、日本自身の西洋化を計るという屈折した西洋主義をとっていた。近代西欧社会の基本的理念である自由と平等に基づく個人の解放に強い衝撃を受けながらも、外圧に対する国家統一を優先させる中央集権の国家体制を是とせざるを得なかった。とりわけ明治十四年の政変以降の知識人の態度は微妙に変化していき、既成の政治権力に自己を同一化しつつ、一日も早く西欧の段階に達することを推進させる国家主義へ傾斜していった。

官学を代表する立場にある外山が既成権力の存在を肯定し、それに若干の論評を加える形で、科学の名において、終始社会有機体説をとったのは、彼もまた国家主義によって西洋の段階に近づくことを考えていたからである。外山がミシガン大学へ贈った日清戦争の写真帖などは、アジアの一小国日本が列強に伍して戦勝したことを誇示しており、西洋諸国の仲間入りをしつつある「近代日本」をアメリカの友人に知らせようとしたものである。

日本における明治期の社会学は、現状是認の保守的立場を推進する役割を果たしたといつてよい。その理論的根拠をスペンサーの社会有機体説に求める講壇の学者の声は、明治政府をしてスペンサーを信頼せしめた。森有礼はアメリカ公使の当時イギリスにスペンサーを訪れて、日本

の制度改革について彼の見解をたずねているし、金子堅太郎も親しく訪問、また手紙の往復により憲法の制定、条約改正、内地雜居などの問題についてその意見を求めている。⁴² 明治初期にいかにスペンサーが高く評価されたかは、その死去に際して田口卯吉が「如何に貶斥せんとするもスペンサーは近世の巨人なり。思ふに彼はギリキのソクラテス、プラトー等と肩を比ぶものなるべし、近世ベーコンありと雖も余は其の人となりを卑む。ケネー、アダム・スミス、マコーレー、新井白石、オーギュスト・コントありと雖も、余は、スペンサーの彼等に比して一頭地を抜けるを見る」⁴³と云うほどであった。しかしスペンサーの思潮が西洋諸国におけるようにどれほど正当に把握されたかは多大の疑問である。ここに当時の文化の程度の制約と社会情勢が然らしむる撰取の仕方があらわれているからである。河合栄治郎は「彼の思潮の特徴は其の自由主義的上部構造に在るよりも、より根底に民衆をして『質す心 (questioning spirit)』と批判の眼 (critical eye) を養成するに在り、欧米においては正に此の役割を果たしたのであるが、我が国において之がいかにほど根を宿したかは疑いなきを得ない」⁴⁴と述べているが、このことはスペンサーに限らず外来思想の移植一般に云えることであった。

七

外山は講壇社会学者であった。論客ではあったが政治家ではなかった。なるほど貴族院議員であり、文部大臣になったが、やはり自ら終生の職務と考えていたのは教育であり、大学運営であった。「勤勉、健康、

および公平の三者は、余他人に恥じず⁴⁵」と表明していたほどに、三十年の間流憾に罹った数日を除いて一日たりとも大学を休まなかったといわれている。

外山の死がミシガン大学に伝えられたのは小野英二郎によってである。エンジェルに宛てた小野の手紙の全文が大学新聞に転載されているが、それは「外山が昨日五三才の生涯を閉じた」という報告で始まっている。外山の生前の輝やかしい日本での経歴を述べたあと、死去に先立ち勅旨により種々の榮譽が与えられたこと、友人学生のみならず日本の知識階級すべてがその死を悼んでいること、最後に会ったのは昨年十二月で、東京アンナバー協会の場合の日取りの打合せで訪問したのだが、そのとき、秋以来最初はインフルエンザで、後には肺炎になって伏せていたのをはじめて知ったこと。その後自分は旅行に出かけ一週間前に東京に戻ってみれば、細菌が耳から脳に至り、手術を施さねばならぬほどになっていたが、大学病院での手術は不成功だったことなどを詳しく報せている。そしてこの手紙を書き送るのは、あなたが非常に深く外山に関心を持っておられ、彼もまた最後の一瞬まであなたとミシガン大学に誠実であったことを私はよく知っているからだと結んでいる。日付は一九〇〇年三月七日で、文面によると死亡した翌日にしたためられたものである。⁴⁶

『山存稿』によると、外山の死亡月日は三月八日になっているが、小野の文面からすると三月六日が死亡日になる。二日の違いはどこからきているのか。小野は三月九日と手紙の日付を記したのに、大学新聞が印刷の段階で七日と誤ったのかもしれない。9と7は似通っているから

充分考えられる。今一つ考えられることは、小野の書いているとうり六日に亡くなっているのだが、名誉教授の称号授与の手続きか何かで、書類上八日死亡にしたとも考えられる（外山は東京帝国大学で名誉教授の称号を授けられた最初の人である）。⁴⁷ こういう処置は時たまとられることで、勝海舟の場合など、相続が決まらぬため、爵位の断絶を怖れてすでに死亡しているのに危篤にしてあった旨、外山の日記に記されている。⁴⁸ これらの事実を勘案すれば、外山の場合も死亡日を二日遅らせる配慮がなされたと考えられぬわけではない。しかし外山の死亡日が六日であったか、八日であったか、ここでは断定しがたい。

小野の手紙にあるように、外山は絶えることなくミシガン大とつながりを保っていた。外山を訪れる同窓生も少なくなかった。竹村謹吾や斎藤金平の来訪は日記のところどころに記されているし、富士見軒での「アンナバー会」に臨むという記述も日記に見出せる。⁴⁹ 外山はミシガン大学の同窓会であるこの会の有力メンバーであったことは間違いない。赤門を代表する論壇の雄として公私に多忙をきわめた外山にとって、アンナバー会は留学の思い出を語り合える人々と旧交を暖めることの出来る安らぎの場であったであろう。

註

- 1 『高橋是清自伝』六四―五頁、昭和十一年、千倉書房。
- 2 『山存稿』「外山正二先生小伝」一四頁。
- 3 Yeihiro Ono, "Japanese Students," in *Michigan Alumnus*, vol.13, 1907 January, p.143.
- 4 『山存稿』「外山正二先生小伝」二〇頁。
- 5 Lindsay Russell(ed.), *America to Japan: A Symposium of Papers*

- by Representative Citizens of the United States on Relations between Japan and America and on the Common Interests of the Two Countries, Putnam's Sons, 1915, p. 38.
- 9 *The University of Michigan Daily*, April 11, 1900.
- 7 *The Detroit Free Press*, Sunday, September 2, 1900.
- 8 Theodore R. Chase, *The Michigan University Book 1844-1880*, Detroit: Richmond, Backus & Co., 1881, p. 153, p. 158.
- 6 *Catalogue of the Officers and Students, 1870-1875*, p. 54, University of Michigan.
- 10 石附実『近代日本の海外留学史』ミネルヴァ書房、一九七二年、三三五頁。
- 11 *Catalogue of the Officers and Students*, p. 56.
- 12 渡辺実『近代日本海外留学生史 上』講談社、一九七七年、二五八頁。
- 13 『森有社全集第二巻』宜文堂書店、昭和四七年、八四頁。
- 14 石附実、前掲書、三二五頁。
- 15 柳生四郎「外山正一の日記」(東京大学出版会『U』)五〇〜七〇号、一九七六年十二月—一九七八年十一月号)
- 16 一八七五年四月十日付と、一八七八年十二月二七日付の二通。
- 17 一八八九年にミシガン大学で Ph.D. 取得。帰国後同志社で教鞭をとり、後に日本銀行大阪副支配人、ニューヨーク、ロンドン支店長、本店営業局長を経て日本興業銀行に移る。
- 18 Yejiro Ono, op. cit., p. 144.
- 19 Robert Jay Groner, Japanese Students at the University of Michigan, 1872-1900, non-published paper, 1975, Michigan Historical Collection.
- 20 Department of L. S. & A., University of Michigan の新籍簿より。
- 21 『外山存稿』「外山正一先生小伝」二二頁、二五頁。
- 22 *Catalogue 1870-75*, University of Michigan.
- 23 M・カーチ著、龍口直太郎他訳『アメリカ社会文化史』中巻、法政大学出版局、昭和三十一年、四一六—八頁。
- 24 The University of Michigan, a pictorial history, 1967, pp. 28-32.
- 25 *The Michigan Argus*, Ann Arbor, Friday, October 10, 1873.
- 26 斎藤金平は外山が去った一年後の一八七七年にミシガン大学法学部に入学、学位を得て帰国後はしばらくは教育界にいたが間もなく裁判所の判事となり、大阪、広島、函館、東京などに赴任。
- 27 ベンジャミン・フランクリンが一七五八年に著わした『富への道』という題名に由来する。
- 28 一八八九年にアンドリュー・カーネギーが『ノース・アメリカン・レビュー』に書いた論文の題名。
- 29 Richard Hofstadter, *Social Darwinism in American Thought*, 1944, (Revised Edition), Boston, Beacon Press, 1955, (Introduction).
- 30 Charles H. Cooley, "Reflections upon the Sociology of Herbert Spencer", in *The American Journal of Sociology*, vol. 26, 1920, p. 129.
- 31 Hofstadter, op. cit., p. 45.
- 32 *Autobiography of Andrew Carnegie*, p. 327.
- 33 小畑久五郎訳『ベンジャミン・カーネギー自叙伝』富山房、大正十一年、五二七—八頁。
- 33 神原胖夫「産業主義とソーシャル・ダーウィニズム」(斎藤真編『機会と成功の夢』講座アメリカの文化三、南雲堂、一九六九年、一八八頁)。
- 34 『のびのび』関じつじ、Thomas C. Cochran of William Miller, *The Age of Enterprise: A Social History of Industrial America*, Macmillan, 1942. Revised edition in Harper Torchbooks, 1961 及び Irvin G. Wyllie, "Social Darwinism and the Business Man", in Carl N. Degler (ed), *Pivotal Interpretations of American History*, vol. 2, Harper & Row, 1966 を参照。
- 35 A. G. Keller & M. R. Davie (eds), *Essays of William Graham Sumner*, II 1934, p. 56.
- 36 Herbert Spencer, *An Autobiography*, 1904, II p. 113.

- 37 末広重恭『二十三年未来記』明治十九年、八六頁。
- 38 下出隼吉『松島剛訳「社会平等権論」解題』、『明治文化全集』第五卷、日本評論社、昭和二年、「解題」三五頁。
- 39 外山正一「民権弁惑」明治十三年『山存稿』前編 四〇五―六頁。
- 40 同右書 四三二頁。
- 41 『山存稿』後編下、三二五―二二八頁。
- 42 下出隼吉『明治社会思想研究』二三〇―二頁。
- 43 『鼎軒田口卯吉全集』第二卷、六二二頁、昭和二年。
- 44 『河合榮治郎全集』第八卷、明治思想史の一断面』社会思想社、一九六九年、六九頁。
- 45 『山存稿』前編 三三三頁。
- 46 Yeihiro Ono, "Death of Dr. Toyama" in the *University of Michigan Daily*, April 11, 1900.
- 47 渡辺実、前掲書、三三七頁。
- 48 柳生四郎、前掲書、明治三十二年一月二一日の日記より。
- 49 同右書、明治三十二年四月一八日と八月二六日の二回記されている。

(本稿は神戸女学院大学研究所の研究助成金を仰いでなされた。)

(付記) 本研究に際して、ミシガン大学ベントリー・ヒストリカル図書館とL

・S & A学部より資料の閲覧を許され、多大の援助を与えられたことに深甚の謝意を表します。

原稿受理一九八二年四月一五日